

新年度スタート!

田中研新聞

第9号

2014年
5月1日発行

2014年5月1日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室 毎月発行
http://canonion.is.konan-u.ac.jp
編集長：大畔 裕 (M2)
編集委員：吉岡一樹 (M1)・宮尾翔太 (B4)

平成26年度がスタートしました。今年度の田中研は、田中教授と、修士2年が3名、1年が1名、学部4年生が6名でのスタートとなりました。秋に3回生を迎えるまではこの体制でいくこととなります。修士課程1年の1名を除き、学生は全員進路決定が必要な年です。既に内定をもらっている人もありますが、場合によつては、1年間がらぶっても結果が出ないこともあります。自分が本当にやりたいことは何かという自分

の意思の部分と、他人から見たときに自分の価値は何かという部分がマッチしない、結果は出ません。マッチするところは必ずあります。自己評価が正しくできていなくて、希望するところが自分の価値を發揮できるところではないときに、失敗することになります。その場合、対処方法は2つ。1つは志望を変え、自分を受け入れてくれるところを探すことです。もう1つは、自分を変えて、あくまでも初心を貫徹する

ということ。後者のためには、自己改造が必要で、これには時間がかかるので、学部生向けのゼミの中で、そうしたことに意識を持って指導していき、なかなか自分を変えることができない人があっても、そういう人は、自分を見つめ直すことが必要です。

さて、私は2年間の図書館長の役職を終えると同時に、今年度から学部長という新たな役職に就きました。学部全体に責任ある仕事



4月9日にウィンドウズXPが長期にわたるサポートを終了した。アナウンスは以前から行われていたが、コンピュータへの関心が薄い人達のあいだではあまり認知されていなかったように、中には困惑した人もいた。我が家では、私のは3年ほど前に、家族用は昨年ウィンドウズ7に切り替えたので、今回の騒動は割と他人事として捉えていた。普段家で使われているPCは7が数台とビスタが1台、あと8が1台・・・。

ネットブックの再利用
XPからLinuxに
のマシンへのLinuxのインストールを紹介しているウェブサイトに多数見つかった。Linuxには我々がプログラミング実習で使ったVine Linuxのほかに、UbuntuやCentOS、ほかにも数多くのディストリビューションが存在する。私は初めて自作パソコンを組んだときに費用を抑えるために一時的にUbuntuをインストールしていたことがあり、その後も買ったマシンにインストールしたり、仮想ドライブに入れて、遊ぶことはあった。だが、最近のUbuntuは動作が重く、シングルコアのAtomではとても快適に動かさず、選肢としてはナシである。そこで目をつけたのが、Ubuntuの派生のOSだ。派生との主な違いはデスクトップ環境であり、Ubuntuはデスクトップ環境にUnityが使われているが、その代わりにXfceを使用しているXubuntu、LXDEを使用しているLubuntu、KDEを使用しているKubuntuなどがある。中でもXubuntuとLubuntuは軽量であり、ネットブック

論文検索について
図書館ガイダンスを開催
ゼミでは毎年、図書館から4回生に向けてガイダンスをしてもらっている。私自身はこれで3回目なので、内容を理解しているが、4回生の時には知らない部分も多かった。のちに類似論文を探すなど、有意義な時間になったと思っている。図書館では、論文の複写などは置いていないので、学部生にとっては先生の助けなしではお目当ての論文を探すのはインターネットを使わなければ非常に困難であり、先生に相談して

さて、今回はネットブックを再利用する手段としてXubuntuをインストールしたが、このネットブックを継続的に使うことはおそろくないだろうか。というのも、今までUbuntuをインストールしたときも、知的好奇心から普段使わないOSを使ってみたという理由がほとんどで、一通り弄って満足して放置するのは毎度のことである。今回も実験台として活用したにすぎない。ウィンドウズのソフトと互換が利くといっても、やはり不便なことも多いし、それを含めて楽しめるくらいでないと、ウィンドウズの代わりとしての積極的な活用は難しいのではだろうか。しかし多くのLinuxは無料で公開されているので気軽に試すことができる。使わなくなった古いパソコンに入れて遊んでみたら、中にはハマる人もいられるかもしれない。「入れた方がいいがウィンドウズに戻せないじゃないか!」等の苦情は受け付けられないので、自己責任でお願いします。(大畔裕)

ことができる。参考文献を探すことも多いので、今のところは実感がわかずとも今後、確実に役に立つであろう。著作権などの関係上、新規の論文は中身を見ることのできないものも多いが、13号館1F事務室でも情報処理学会などの電子データを最新の物から過去の分を含め所有しているのだから、これらを借り、参考にすることもできる。また、院生と教員のみではあるものの、図書館に行けばお目当ての論文の複写を申請すれば後日、中身を手に入れることが可能なものもある。今後とも活用できればと考えている。(野々口誠人)



の動作報告もあったので、あとは直感でXubuntuを入れることに決めました。どうせ無料だし、気に入らなければ入れ直せばいいのだから、そこら辺は適当でいいだろう。

インストールは特に大きな問題は起きずに完了した。実際に操作してみると、ウィンドウズと異なる部分はあるが、許容範囲である。はじめから互換のオフィスソフトなどが入っている。足りない分はUbuntuソフトウェアセンターで検索してインストールすればいい。XubuntuはGnumericとAbiwordという聞いたことのないものだったので、私はウィンドウズ版も存在するLibreOfficeと、普段から使っているオンラインストレージのDropboxをインストールした。しかし、いくらXubuntuとは言えど、やはりシングルコアのAtomでは少し動作がもたつく場面が見られた。快適な動作を求めるならもっと上の性能が要りそうだ。Core2 Duoのマシンも埃かぶって放ったらかしになっているし、これにもなにか入れてみるか。

二輪の免許を取得中

就活で見つけた新しい趣味

今年の年始から就活に全力投球し、なんとか早い時期に終わらせることができたので、普通自動車二輪の免許を取ることにした。きっかけは、とある自動車&バイク部品メーカーの企業説明会に行ったときの先輩社員懇談会。社員も学生もみんなバイクの知識が豊富で話についていくことができず、悔しい思いをした。だが一方で、バイクに関して楽しそうに話す彼らを見て、自分も乗って快感を味わってみたいと思った。バイクは知識があれば自分で整備することができる。パソコンを組み立てたり分解したりするのが好きなので、自分の手で弄り直すことにハマりそうだというのも理由だ。



4月1日に企業から内定の連絡をもらい、20日に基本情報技術者試験があったので、21日に教習所に入校した。教習所に通うのは学生のうちでないとい時間的な制約があるし、時期が遅くなると学会発表の準備や修論などに影響する可能性もある。できる限り早く免許を取得したいところである。

通うことになったのはポートアイランドドライビングスクール。3年前に自動車教習を卒業して以来だ。来慣れた場所だから気楽だと思ったが、2輪の教習は自動車のコースの奥にあり、3年前はちゃんと見たことがなかったコースや設備を使うので、新鮮な気分である一方、やや緊張気味でもあった。

初回の教習ではバイクに跨るまでの動作や操作の仕方など基礎的なことから教わった。しかし基礎とはいえず、これがまた難しい。教習で使用しているバイクは、普通自動車二輪免許で運転できる中で最大の400ccであるホンダのCB

400SFというモデルなのだが、この車体は約200kgある。停車しているあいだはこの巨体が倒れないように両足で支えないといけないから大変だ。一定以上傾くと支えきれなくなり、そのまま倒れてしまう。倒れたら倒れたでここから大変で、自分で起こさなければならぬのだが、普通に持ち上げようとしても全然持ち上がらないので、コツが必要になってくる。説明は受けるが中途半端な理解で行くと、私のように腰を痛めることになるので要注意だ(治るのに4日程かかった)。ユーチューブでわかりやすい解説の動画を見つけたので、2回目の

教習では腰に負担をかけずに起こせるようになった。この重量なので、走行中にバランスを取るのも大変だし、そのうえMT車なのでギアチェンジもしなければならぬ。両手両足で違う作業をしなければならぬので、操作がモタついたり誤ることもしょっちゅうだ。コースが狭いので2速から3速に上げたらずぐブレーキを掛けなければならぬのだが、3速に上げたことに満足して壁に突っ込みそうになったりもした。体で覚えるまでの辛抱なのだろうが、どうも公道で走る未来が見えない。自動車の教習を受けていたときも初めはギアチェンジでモタ

ついて心が折れそうになっていたが、次第にできるようになっていったので、同様になんとかなるものだと思いたいところである。

今のペースだと免許の取得は早くても5月末、遅くても6月中だろうか。できれば取得後すぐに自分のバイクが欲しいのだが、今興味があるホンダのCBR250Rは中古でも結構高く、安いものでも30万円以上、年間維持費は参考にしたウェブサイトで250ccは約8万円かかるようだ。今は125ccのバイクを買ってひとまず慣れるべき？いずれにせよ金欠気味なので節約していきたいところである。(大畔裕)

わたしの訪れた町

第1回 シドニー

日本はあまり旅行をしていない方ではない。この年になって、まだ行ったことがない国単なる通過は除くが東・北日本を中心にはかなりの数、職業柄、外国は結構行っている。そこで、外国の町を中心に、私の印象に残っている点を挙げて、読者の皆さんにもお勧めできればと思

い、これから連載してみようと思う。外国の町といえば、ウイーンに1年半住んでいたの、他の町とは思えないレベルが異なる。これは後に置いておいて、訪問したことのある町をランダムに挙げていこうと思

う。私が初めて外国に行ったのは、昭和49年、高校3年の夏休みである。シドニー大学物理学財団が国際交流イベントとして、外国の高校生3年生を招待し、国際科学学校というのを開いている(今も続いている)。

文部省(当時は文部科学省とは言わない)が各都道府県を通じて推薦された高校生を文部省に集め、英語の面接試験で5名を選び、私はその一員(奨学生)として派遣された。文部省の先生を含む6人が東京を発つてから2週間の間に西から地球を回り、イギリスの5人、アメリカの10人と合流し、ハワイを経由してシドニーに到着。その後2週間ホームステイをしながら国際科学学校に通い、最後、香港旅行がおまけに着いて日本に帰るという行程だった。当時、国際便は羽田空港だった。1ドル308円の固定相場制、1ポンドが800円だった。円が安いのは日本の輸出産業には良かったが、外国旅行はまだ高嶺の花だった。そういう時代に、招待で行かせてもらったのだから、ありがたい。噂では、我々5名には一人あたり200万円ほど掛かっているとのこと

だった。5名それぞれ、国際科学学校に参加した100名の現地の生徒の家にホームステイさせてもらった。私のホームステイ先は、両親と子供7人の、大家族だった。英語には少し自信があったが、いわゆるオーソドックスな英語には大変戸惑った。それでも、2週間の間、家族の一員として受け入れてもらい、あちこち連れて行ってもらったのは大変役に立ち、最後空

港ではウルルンとなったのである。なお、このときから約40年経過したが、日本人の私以外の4人も、専修大学教授、NHK解説委員、小説家、大手ゼネコン社員と、それぞれ社会で活躍しており、今でも連絡を取っている。

休みに連れて行っても行ったところ一番印象に残っているのは、シドニーの西にあるブルーマウンテンへのハイキングと、タロガ動物園である。ハイキング以外にも、近隣の街へドライブで連れて行ってもらったりした。あの頃可愛かった妹達が、今は立派な女性になっているのをフェ

ロボット実験室開設

より便利な研究環境に

今年度の4月から13号館2階にロボット実験室が新たに設置されました。昨年度まではロボットを屋内



で実験する環境が十分に整っておらず、廊下やそれ以外の研究室内で実験を行っていたため、ロボット

今年度の4月から13号館2階にロボット実験室が新たに設置されました。昨年度まではロボットを屋内で実験する環境が十分に整っておらず、廊下やそれ以外の研究室内で実験を行っていたため、ロボット

で実験するスペースなどが十分に確保できませんでした。しかし本年度から設置されたロボット実験室によって、ロボットを屋内で実験する際に通行人などへの配慮せずに、実験が行えるようになりました。またロボット開発の研究室(田中研、和田研、梅谷研等)の学生は、セグウェイ等の移動台車ロボットを使って実験する際に先生の許可が省かれたことで、スムーズに実験が行える環境が整ったと言えるでしょう。

この実験室には「漫才ロボット」で有名な北村研、灘本研等が合同開発を行っている「アイちゃん」と「ゴン太」や、田中研、和田研、梅谷研等が合同開発を行っている「Koro」が収納されています。また私たちが開発を行っているKoroは、8月に行われるデモに向けて現在開発中です。

こうした環境が整うことで、様々な先生方や学生などがロボットに触れる機会しんどかったという印象が強いです。そもそも、日本人以外では平日頃から英語を使っている人ばかり。この状況は酷である。しかし、そういう環境が好きな人もいます。このときの5人のうちの一人は、学生になってから、日米学生会議というものに熱を上げていた。それは立派と思う。もともと、何をやるにしても、平等なんてことはあり得ないのである。そのときそのときの環境に適応していかなければ、やっていけないのがこの世の常であると理解した。

英語は元々自信があった。そのため、そんなに英語ができるのなら、それを活かせる文系学部に行ったらどうかとも担任から言われたが、私は、英語を理系の勉強の中で活かしたいと、理系志望を貫いた。その結果、英語については、入試でほぼ完全解答ができた。これは、旅行のおかげだろう。

2週間の学校は、「太陽エネルギー」がテーマで、世界のあちこちから集まった先生が百数十名を相手に特別の講義をした。テキストはあったが、なかなか聞き取れない。それでも、同行の先生が、「一人一回は少なくとも質問しなさい」と言われるものだから、私も何とか質問をした。休み時間も何となく質問をした。休みの間に外国の生徒と将棋を指したりしたが、なかなか

研究室対外活動予定

5月23日 田中教授、システム制御情報学会で口頭発表
5月28日 野々口君、ロボティクス・メカトロニクス講演会2014 in Toyamaにてポスター発表

編集後記

こんな企業に入ってこんな仕事をしたというビジョンはあったのですが、人生はなかなかうまくいかないもので、きつと夏あたりに聞いたことのない企業の内々定が出るのだろうと漠然と考えていました。しかし、3月初旬から受けていた、是非とも行きたいと思っていた某社の選考がトントン拍子で進み、そのまま内々定頂くことができました。自分が関わる製品が、将来世界中で使われるのだということを想像すると、今からワクワクが止まりません!

就職活動は、今後約40年活動するであろう居場所を決める人生の大イベントです。そのために自己分析や企業研究、いろいろな人と喋ったり文章を書いたり頑張りましたが、この努力が報われたのは、運もあつてのことだと思えます。

さて、気づいた方もいるかもしれませんが、今回から編集担当が2人増えました。と言っても今回は殆ど大畔が作っています。次回以降は少しずつ仕事をシフトしていきたいと思っております。ご期待ください。(大畔裕)